

出題分析			
試験時間	学部により異なる	配点	学部により異なる
		大問数	学部により異なる
分量（昨年比較）	〔減少 同程度 増加 〕	難易度変化（昨年比較）	〔易化 同程度 難化〕
<p>【概評】</p> <p>読解問題 2 題に関しては例年通り各 4 題の形式であったが、分量が昨年の 1172 語から本年は 1351 語へと増加した。また、説明問題の記述文字数は、昨年度が例年よりも 1 題少なく合計 3 題だったが、今年度は例年通り 4 題に戻ったため、昨年の 210 字から 320 字へと大幅に増加した。一部該当箇所の特をミスしてしまう可能性があるものもあり実力の差が出やすい問題であったと言える。英作文では、問題 B の語数が昨年に引き続き 100 語であったが、理由を 2 つ述べるよう指示書きがあった点がこれまでにない変更点であった。問題 AB ともに例年並みで受験生にとって決して書きにくいものではなかったであろう。総じて、読解問題が例年よりも難しかった分全体の難易度はやや高めであり、英語を正確に読み書きできる力が備わっている者とそうでない者の差が出やすい問題であったと言えよう。</p>			

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
I	読解「日本からやって来た男性」	例年通り和訳 2 題、説明問題 2 題の合計 4 題の構成であった。語彙レベルが全体的にやや高く、受験生にとって内容がとりにくいであろう箇所が散見された。問 2 の説明問題では not new to の解釈が正確にできないと、該当箇所を絞り込むのに苦戦したであろう。問 4 の和訳問題も決して容易なものではないため、実力差が反映されやすい問題と言える。	難
II	読解「中世ヨーロッパのワインが当時の気候を知るカギとなる」	こちらも例年通り和訳 2 題、説明問題 2 題の合計 4 題の構成であった。ただ、問 1 は下線部のない説明問題となっており、該当箇所を特定しにくくなっていた。文章は全体的に読みやすいものであり、設問はいずれも解答しやすいものであった。	標準

設問別講評			
Ⅲ	<p>A 和文英訳(a)『こ とばが変われば社会 が変わる』 (b)「私が思う日本 『インクルーシブ社 会の実現へ、行動 を』」</p> <p>B 自由英作文「16 歳未満の子どもにソ ーシャルメディアの 使用を禁止すべき か？」</p>	<p>問題Aでは例年通り短文の和文英訳が2題出題された。2つの異なる文章から1問ずつの出題となるこの形式は、ここ数年連続して採用されている。(a)は比較的短い2文で構成されており、それぞれ基本的なもので書きやすかっただろう。(b)では「障害者」の英訳が問われたが、日頃から英訳のトレーニングをしていないと正確に訳せなかったかもしれない。</p> <p>問題Bは例年通りエッセイ形式のものであった。総語数も昨年同様100語程度であったが、今年から理由を2つと明記されるようになった点は大きな変更点である。テーマについても近年話題となっているものであり、受験生にとって身近な取り組み易いものであった。しっかりとトレーニングを積んでいた学生にとっては決して書きにくくはなかったはずだ。</p>	標準
Ⅳ	リスニング	解答省略	

合格のための学習法
<p>まず早い段階で基礎・標準レベルの英文をフィーリングに頼ることなく、構造に基づいてしっかりと読める力をつけよう。そのために①必修レベルの単語・イディオム力 ②文構造を正しく見抜く力 ③前から文章を正確に読む速読力と精読力 この3つを常に意識しながら英語力を磨いていこう。早い段階でこのベースが構築されれば、その後の下線部和訳問題、説明問題、英作文といった記述のトレーニングがスムーズに進むため、2次試験を突破できる可能性は高まっていくはずだ。逆にこれらの力がないまま過去問等のトレーニングを行っても、何気なく解くだけにとどまり実力アップにはつながりにくい。出来る限り早く効果的な学習スタイルを構築し、しっかりとトレーニングを積んでいこう。自由英作文においては今年のような社会的に話題となっているトピックに加えて一般的なテーマについても問われやすいため、常に自分なりの考えを最低でも2つ持つよう心掛け、本番で少しでも早く内容を広げられるトレーニングを積んでおくことが不可欠である。</p>